攻防自在・空手拳法

十八の研究

師範 摩文仁賢和著

附録 秘書 武備誌



東京・興武館・發行

空手拳法

師範 摩文仁賢和著

師範 摩文仁賢和著

空手研究叢書第二篇

攻防自在
空手拳法

十八（セーパイ）の研究

（附・秘書「武備誌」）

東京 興武館 發行



前列右・小西康裕氏　中央・本部朝基氏　左・著者



（構へ方）



（受け方）



（拂ひ受けの姿勢）



（鈎手の構へ）

序にかへて

何に事も打ちわすれたり
ひたすらに
武の島さして
漕ぐがたのしき

著者

空手拳法の歌

法曹空手團會長
辯護士　松本靜史 作

一、碧空たかき芙蓉峰
　清き姿のそれの如
わが神洲の大丈夫が
　雄叫びなして揮ふ拳
鳴るくろがねのその腕に
　櫻吹雪ぞちりかかる。

二、南風薫る若草の
　みどりの丘に撫子と

色を競へる手弱女も
　防護のために起つときぞ
一拳たかく搏ちひびき
　膺懲の意氣に燃ゆるなり。

三、春朝月の影ふみて
　冬夕星の冴ゆるまで
鍛へにきたへいそしみて
　龍攘虎揮の早わざを
事あるときぞ眼に見せん
　そこに我等の誇りあり。

—をはり—

兵法の實の道

宮本武蔵

世の中に兵法の道をならひても、實の時の役にはたつまじきと思ふ心あるべし、其儀に於ては、何時にても役に立つやうに稽古し、萬事に行ひ役に立つ様に當る事、是兵法の實の道也。

（「五輪之書」地の巻より）

攻防自在 空手拳法 十八の研究 目次

第一章　空手の豫備運動

我が流派に於ては必ず、基本型や開手型を行ふ前に豫備運動を行ふ。故に拙著「攻防自在護身術空手拳法」にも既に、豫備運動の事を記載いたせしが、再び之れを書くことにする。

即ち豫備運動は筋肉其の他各部關節の柔軟を圖り、兼て其の强靭性と耐久力を養成せしめ、すべての型を習ふ場合に非常に習得しやすく、便利なるが爲めである。

A　脚の運動

イ、 姿勢は直立不動の姿勢にて兩手を腰に取り、兩足は八字立に開き、顎を引き付け、初め右足を指先に力を入れ、踵を上げ、之れを靜かに下して元の位置になし、左右交る交る行ふ事數回。

ロ、 兩足の指先に力を入れて、同時に踵を上げて元の位置となし、之を行ふ事數回。

ハ、 姿勢は初めと同じ。兩踵に力を入れ、胸を開き、足の指先を上に向けて、靜かに元の位置に

なし、之れを繰り返して行ふ事數回。

ニ、兩足を廣く開き、左足を曲げて、右足を眞直に延ばし、左手掌は左足の膝頭を押へ、之を左右交る交る行ふ事數回。

ホ、兩足を引き付けて直立し、腰を前に曲げて、兩手は膝の上に置き、其のまゝ座する如くしては立ち立ちして、之れを行ふ事數回。

ヘ、兩足を交る交る前に出して、足さき（足首）をかるく廻す事數回。

B 首の運動

イ、姿勢は直立不動にて、兩手は左右の腰に取り、兩眼を閉じ、首は輕く下に垂れて、左から次第に上に上にと右に廻し、右から又元の如く次第に左に廻す事三、四回。

ロ、兩眼を閉じ、兩手は腰にし、後に腰を曲げては靜かに元の位置になし、之れを行ふ事三、四回。

ハ、姿勢は前と同じ、兩眼は大きく開き、靜かに首を右から左に廻し、之れを反對に行ふ事三、四回。

C 腰の運動

イ、姿勢は兩足を八字立に開きて立ち、腰を前に曲げて兩手は下にさげ、膝は眞直になし、兩手にて下に押へ付ける如く動かす事數回。

ロ、姿勢は前と同じ、兩手は後に向けて延ばすと同時に、腰を低くして兩足は四股になる樣にし、兩膝を眞直に元の姿勢に立つと同時に、後の兩手を強く握りて、兩腕の處に置き、之れを繰返して行ふ事數回。

ハ、兩手を頭の上に眞直に延ばし、其のまゝ左右に交る交る腰を延ばす事數回。

ニ、立ち方は前と同じ、兩手は、其のまゝ下に垂れて、體を左右に廻し、兩手は輕く振る樣にする事數回。

（尚空手の補助運動として拳の握り方と突き方、蹴り方、打ち方、臂當・立ち方、轉身法、握力增進法等は拙著「攻防自在護身術空手拳法」に挿繪を以て詳しく説明したれば、就きて參照せられたし）

第二章　空手受け方名稱

昔から空手拳法の基本型や、開手型には皆立派な名稱があるが受け方に就いての名稱がないのが、實に遺憾の至りである。

私は教授上、說明上又は子弟の受け方稽古上、便利なるが爲めに、左の通り受け方名稱をつけた。——

A　受け方名稱

上段受け
橫受け（內、外）
橫打ち（內、外）
繰り受け（內、外）

打ち落し（內、外）
裏受け（內、外）
手刀受け（內、外）
拂ひ受け（內、外）
大裏受け（內、外）
輪受け（上段、中段、下段）
空受け
突き受け
鉤手
受け流し
掬ひ受け
臂受け
孤受け
押へ受け

支へ受け
臂支へ受け
關節支へ受け
兩手受け
振り捨て（足の受け方）
掬ひどめ（足の受け方）
拂ひ受け（足の受け方）
膝かへし（足の受け方）
さすまた（足の受け）
逆捨身（投げ方）
合掌返し（投げ方）
交叉受け（投げ方）
後投げ
掬ひ投げ

裏投げ

以上の通りである。

B 組手に就いて

空手を分解すると、基本型と開手型、組手の三つに分つ事が出來る。

基本型は空手の總ての基本で、目的は身體をして定められたる姿勢を取り 氣息の呑吐と力の入れ抜きを調和させ、而して堅固なる體格と武道的氣慨とを養成せしめる。

開手型は幾何かの攻防の術が連結せられたもので、型を色々の演武線を描きて運動をなして居る。その動作は實戰的で、術の目的に適合する様に心氣と體力を有効に運用轉換せしめる型である。

組手は敵對行爲の型で、柔道のきめの型と同じである。組手練習を三つに分つ事が出來る。

イ、單式組手
ロ、複式組手
ハ、眞劍組手

此の三つである。單式組手は相手が攻擊する場合、受けて當てる、と云ふ一擊の簡單な形で、複式は相手が攻擊する時、受けて攻める、敵も亦之れを受けて防ぐと云ふ形が之れである。眞劍組手は今までの組手稽古と異つて、實際に打ち込み、蹴ると云ふ眞劍試合が之れである。

C　受け方基本練習法

構へ方

双方約二尺位の距離に相向つて、共に左足を一歩前に出して構へる。

受け方

甲は攻擊ばかり乙は受けばかりときめる。

初め甲が右拳を以て乙の水月部を突く、乙は右手を以て其の手を内横受けをなす。(圖解參照)

次に乙は其の手を右手を以て外横受けに變る。

第三に乙は左手を以て、敵の手を拂ひ受をなして、右拳を以て甲の水月に當てる。

甲は乙が受けた通り、初め横内受をなし、第二に外横受、拂ひ受と云ふ樣に、之れを双方交る交るに練習す。之れは受け方の練習ばかりではなく、各自の腕を強くする爲めで、丁度劍道の



内横受けの型

ヤートーと同じで、充分効果がある。

(第廿七頁より第三十頁までの挿繪を參照して練習せられよ)



外横受けの型

説明第二十六頁参照



拂ひ受けせんとする刹那

説明第二十六頁参照



内拂ひ受

說明第二十六頁參照

第三章　開手型・十八(セーパイ)の型



十八の型第一圖

（一）構へ方。足は結び立ちに立ち、左手は上に右手は下に重ねて、手掌を睾丸部に當て、顎を引き付けて、眼は眞直に前方を見、肩をさげて、丹田に氣を沈め、足は上下引合す様に踏み立つ。（型第一圖參照）（足の立ち方は拙著「護身術空手拳法」參照）



十八の型第二圖

（二）左足を一歩後方に退きながら、體を右半身に開きつつ、左手は開いたまゝ下より上に向け圓形を畫きつつ水月の處に置き、同時に右手は開いたまゝ、右前に突き出す。其の時指先きを延ばし、甲は右、掌は左に向け、足は四肢に踏み立ち、背を眞直に立つ。（型第二圖）



十八の型第三圖

（三）左足を一歩前進しながら、左手を下に右手を上に、合掌に握り合せて、脊を眞直に立つ。（型第三圖）

（四）右足を更に一歩進みながら、合掌に力を入れ、右甲を下に左甲を上にして、其のまま突き出す。（型第三圖の左右反對の型）



十八の型第四圖

（五）足は其のまゝ四股に立つと同時に、腰を落し、右臂は下より上にはねあげる様にして前に出し、左臂は腹部に落す氣持ちにて下にさげる。（型第四圖）



十八の型第五圖

（六）左足を一歩前進しながら腰をひねり、斜に體を振り向くと同時に、右足を曲げ、左足を延し、左手は水月より足部に向けて手刀にて打ち落す氣持ちにて左足の處に下げ、右手は掌を下に向け開いたまま肘を肩と並行する様に前方に置き、其の時掌は水月部に體は右斜にして前方を見る。（型第五圖）



十八の型第六圖

（七）姿勢は其のまま左手は開いたまま裏受けをなす。（型第六圖）



十八の型第七圖

（八）同時に、腰を前方に向けると同時に、右手刀にて横受けをなし、左手は掌を前に向けて左腋下に置く。（型第七圖）



十八の型第八圖

（九）右足にて前方を蹴りあげて（型第八圖參照）元の位置に足を引き、同時に腰を落して四股に立ち、左臂當てをなして、同時に其の拳にて裏打ちをなす。其時右拳は右腰の處に握つたまま構へる（型第九圖）



十八の型第九圖

説明は前頁参照



十八の型第十圖

（十）其のまゝの位置にて、後に振りむくと同時に、右足を前に左足を後に、猫足立ちの構へに變じ、右拳は下より上に圓形を畫く樣にして横受けをなし、其時左拳は右臂の處に置く、（型第十圖第十一圖）



十八の型第十一圖

前頁の第十圖を正面より見たる圖。



十八の型第十二圖

(十一)其のままの姿勢(卽ち第十圖の如く後向きの姿勢)にて、右手を開いて掌を前方に向く。(型第十二圖但し此圖は正面より見たるもの)

十八の型第十三圖



（十二）左足を半圓になる氣持にて前方へ一歩進めると同時に、左手は下より頭の上に高く差し上げつゝ、下に落して、左腰の處に握つたまゝ置き、體は後方に振り向くと共に腰をひねる様に力を取り右拳は其のまゝ水月部より斜に突き出す氣持ちにて、左側の處におし出す（型第十三圖）

十八の型第十四圖



（十三）其のまゝ後方に振り向くと同時に、左手は開いたまゝ、顔を中心として下より上にあげて、左腕の處に掌を前に向けて構へ同時に右足は半圓を畫きつゝ、左側斜に一歩進み出し、右掌にて下より上にははねあげる様な姿勢を取る。（型第十四圖）



十八の型第十五圖

（十四）左掌を下より上に圓形を畫く氣持にて、左足側の處に拂ひ受けをなし、其のままの姿勢にて前に寄り足にて一歩進み、右手掌は水月部の前におし當てる。（型第十五圖）



十八の型第十六圖

（十五）右足を一歩進めて四股に立ち、右は上に左は下にして（掌を向ひ合せて）圖の如く姿勢を取る。（型第十六圖）



十八の型第十七圖

（十六） 圖の如く兩手を其のまま（開いたまま）左右に開くと同時に　右足は内側に向つて拂足をなし（型第十七圖）、同時に兩中高指拳にて、下に向けて突き落す。（型第十八圖）而して右足を一歩後方に退き、左手にて拂ひ受けをなす。右拳は腰に足は四股に構へる。（型第十九圖）



十八の型第十八圖



說明は前頁參照。



十八の型第十九圖

說明は第四十八頁參照。

（十七）其のまゝ眞直に立ち、右手掌にて上より下に拂ひ受けをなし、左手掌は開いたまま水月部に當て、一步寄り足をなす（第十四の反對）

（十八）左足を一步進めて四股に立ち（第十五六の動作と同じ）、左足にて拂ひ足をなし、兩手は左右に開いて、すぐ兩中高指拳にて下方に向けて突き、左足を後方に一步退くと同時に、右手にて拂ひ受けをなす。（第十六の動作參照）

（十九）右足を前方に一步出すと同時に、後方に振りむき、猫足立の姿勢に取りて左手にて橫受けをなし、右手は握つたまゝ額面に振り突きをなして構へる。其の時兩拳は互に指が向き合ふ樣に構へる。

十八の型第二十圖



（二十）右足を一歩前へ進して、左足は外側に圖の如くして、右手にて横受けをなし、左拳は頭上に置いて構へる（型第二十圖）

十八の型第二十一圖



（二十一）其のままの位置にて、體を左側に振り向くと同時に、左手にて掛けて受けをなす氣持にて、甲を上に掌を下に向け、左手は前に少し延ばし、右手は甲を上に掌を下に向け、水月部の處に置きて構へる（型第二十一圖）



十八の型第二十二圖

（二十二）腰を少しねじる氣持にて、足をねじると同時に、左拳にて圖の如く足部に向けて打ち落す（型第二十二圖）



十八の型第二十三圖

（二十三）足部に向けて打ち落した左拳にて敵の顏面に向けて裏打ちをなす（型第二十三圖）



十八の型第二十四圖

（二十四）左拳にて裏打ちをなすと同時に、體を敵の正面に向け右手にて横受けをなし、（型第二十四圖）右足にて前方を蹴りて（型第二十五圖）元の位置に足を引き、腰を落して四股立に構へ、同時に左拳にて敵の腹部を突く（注意、其の時の拳は指を上に甲を下に向けて突き、右手は開いたまゝ、掌を左側に



十八の型第二十五圖

むけて水月部のところにおき構へる。

(二十五) 左足を其の場より少し前に出すと同時に、體を右側にむけ、右手にて前のように掛け手受けをなす。其の時左手は水月部の處に甲を上に、掌を下にむけて構へる。

(二十六) 前の動作のように右拳にて、足部にむけて打ち落し、同時に其の拳にて敵の顔面を裏打ちし、體を正面にむけると同時に、左拳にて横受けして、左足にて蹴り、其の足を元の處に引き、體を四股立に變じて、右拳にて敵の腹部を突く。其の時の構へは、右拳は指を上に、甲を下にし、左手は掌を前にして、水月部にあてる。立ち方は四股立。



十八の型第二十六圖

(二十七) 左足を左側に一歩退くと同時に、體を猫足立ちに構へ、兩手は右手を上に、左手を下に、圖の如く互に掌をむけあはして構へる(型第二十六圖)



十八の型第二十七圖

（**二十八**）右足を一歩後方に引くと同時に、兩手は握つて、右は下に、左は上になる樣に丁度ねじまはして引く氣持にして變ず（型第二十七圖）



十八の型第二十八圖

（**二十九**）右の動作ををはると同時に、左手は開いて右拳槌にて左足の前の處を打ち、左足を引いて結び立ちの姿勢になり、兩手を合せて初めの構へとなる（型第二十八圖）

‖十八の型終り‖

第四章　十八の型分解説明

型第一圖は構へ方。

型第二圖の動作は、敵が我が水月部を、右拳を以て突き來る場合の受け方。

敵が右拳を以て、我が水月部を突いて來る時、我は左足を一歩後方に退き、同時に我が左手にて敵の拳を上より下に向けて拂ひ落し、同時に我が右拳にて反對に敵の水月を突く。



分解第一圖

型第三、四圖の動作は兩手にて敵が我が右手首を取りたる場合のはずし方（分解第一圖）



分解第二圖

敵が兩手にて我が右手首を握り取りたる時、我が左手を右手と合し（型第三圖參照）、其のまま下より上に半圓を畫く如く敵の兩手（卽ち握りしまま）を逆に押し返し、分解第二圖の如く左手刀を以て敵の面部を打ち込む

若し敵が力が强くてはづれない場合には、一旦逆にはね返したのを、其のまま腰を低く落して型第四圖の如く右臂にて、敵の握りし兩手を下より上にはねあげる。



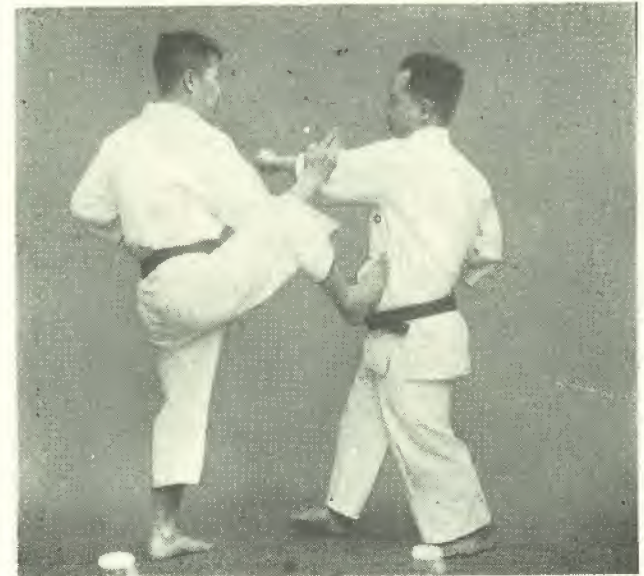
分解第三圖

型第五六七八九圖の說明

敵が右足を以て我が腹部に蹴りあげ、更に右拳を以て攻擊する場合の受け方。（分解第三圖）

型第五圖の動作は、敵が我が腹部を蹴らんとする時、我は體を斜に向け、腰をねじ、同時に左手に圖の如く下段拂ひ受けをなす。（型第五圖）

敵が更に右拳を以て、我が水月部に突き來る時は、我は足を拂ふた左手を以て、敵の拳を裏受けし（型第六圖）、同時に我が右手刀を以て、敵の首筋を打ち込



分解第四圖

むべし（型第七圖）
倘敵が左拳を以て、我に攻撃する場合は、我は右手刀を以て、敵の拳を横打ちし、同時に我が右足にて敵の腹部を蹴り込む（型第八圖、分解第四圖、同第五圖）と同時に敵の水月部に左肘當をなす（型第九圖）



分解第五圖

說明は前頁前照



分解第六圖

型第十、十一、十二、十三圖の說明。

敵が右拳を以て突いて來る場合（分解第六圖）の逆の取り方。

敵が右拳を以て、我が水月を目がけて攻撃する時、我は左足を一歩後方に退くと同時に、我が右腕にて外横受けをなし（型第十、十一圖）、其の受けた右手にて敵の突いた手首を取る（型第十二圖）と同時に、我が左足を一歩前に（敵の前）深く進み出ると同時に、我が左手にて敵の手を逆に取る。（型第十三圖）



分解第七圖

敵に逆を取られた時の受け方。

分解第七圖のように敵に我が右腕を逆に取られた時、我は左手を以て敵の逆に取りし臂の處を押すと同時に、我が右手を引きおろし、同時に其の足を敵の前に右足にて敵の膝頭の處を蹴り踏み入れ、我が尻にて敵の腹部をはねあげると敵は投げ飛ばさる。



分解第八圖

型第十四圖の說明

若し逆に取りし手を前の如く受けようとした場合には如何にして防ぐか。

逆に取りし敵の手を敵が前の方法で以て受け樣とした時、我は敵の手首を握りし手をはなすと同時に、體を敵に向けて、右足を敵の股の處に入れ、同時に我が右手にて敵の金的を押し當て左手は敵の胸部を押す（型第十四圖、分解第八圖）



分解第九圖

型第十五、十六、十七、十八圖の說明。

敵が左拳左足を以て同時に攻擊するのを如何に防ぐか。

敵が左拳と左足を以て同時に攻擊する時、我は少し體を斜にして、左手にて敵の蹴り上げる足を拂ひ取り、我が右手にて敵の突いて來る手をすくい受け（型第十五圖、分解第九圖參照）同時に我が右足を一步敵の後方に踏み出し、敵の手を押へた右手を其の腋下より首の處に差し入れ我が右足にて敵の足を拂ふと



分解第十圖

敵は倒れる（型第十六、十七圖分解第十圖）其時我は左右兩方の中高一本拳にて敵の金的と水月を同時に突き當てる（型第十八圖、分解第十一圖）



分解第十一圖

說明は前頁參照

型第二十圖の分解說明。

敵が右拳を以て、我に攻擊する場合、我は體を少し左側に變じ、同時に我が右手にて敵の突き來る腕の關節部の處を、下より上に橫受けして敵を押へ、同時に左拳にて振り突きする。

型第二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七圖の分解說明。

敵が右足を以て我が腹部目がけて蹴りついて來る時、我は型第二十二圖の姿勢の如く體を後方にねじつて、我が左拳にて敵の足（蹴りついて來る足）を打ち落し、同時に其の左拳にて敵の顏面を裏打し（型第二十三圖參照）、

再び敵が左拳にて我が水月部に攻擊する時は、我は右手にて（型第二十四圖）の如く橫受けし、

同時に我が右足にて敵の腹部を蹴る（型第二十五圖）

尙ほ引き續き敵が右拳にて我が顏面に攻擊する場合、我は右足を一歩後方に退きて、四股立に變じ、我が左拳にて敵の腹部を當てる。

（型第二十七圖、分解第十二圖）

說明は前頁參照



分解第十二圖



分解第十三圖

敵が我が顔面めがけて突き來る場合の逆投げ。

敵が我が顔面めがけて突いて來る場合、我は右足を一歩後に引くと同時に、我が右手にて敵の突いて來る手首を下より上に上段受けをなす（分解第十三圖）と同時に、其の手首（右手首）を握りて少し横に押して、敵の體を崩し、再び敵が左手を以て我が水月に突いて來る時、我は左手にて下より上に掬ひ受けをなして、敵の手首を握り取る（分解第十四圖）而して其の取りし



分解第十四圖

兩手を、分解第十五圖の如く上より下に向けて逆に取り、我が足を後方に引きて倒す。倒れた敵の兩横面を、我が兩拳鎚にて打つ（分解第十六圖）。



分解第十五圖

說明は前頁參照



分解第十六圖

說明は第七十八、九頁參照

附録

武備誌

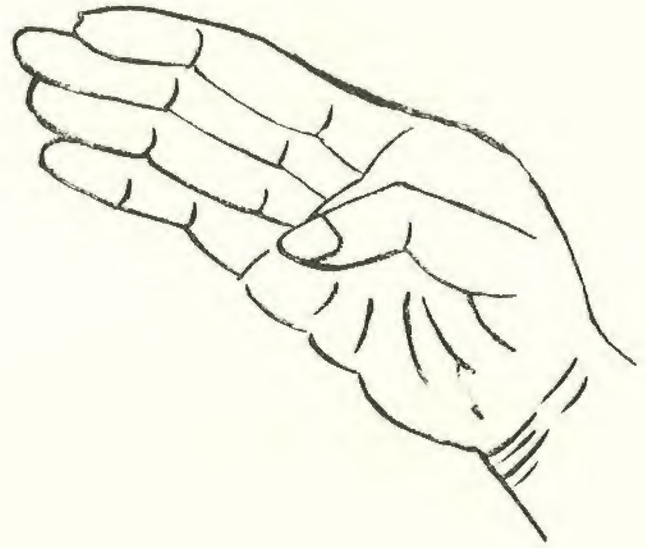
參考資料記載に就いて

摩文仁賢和

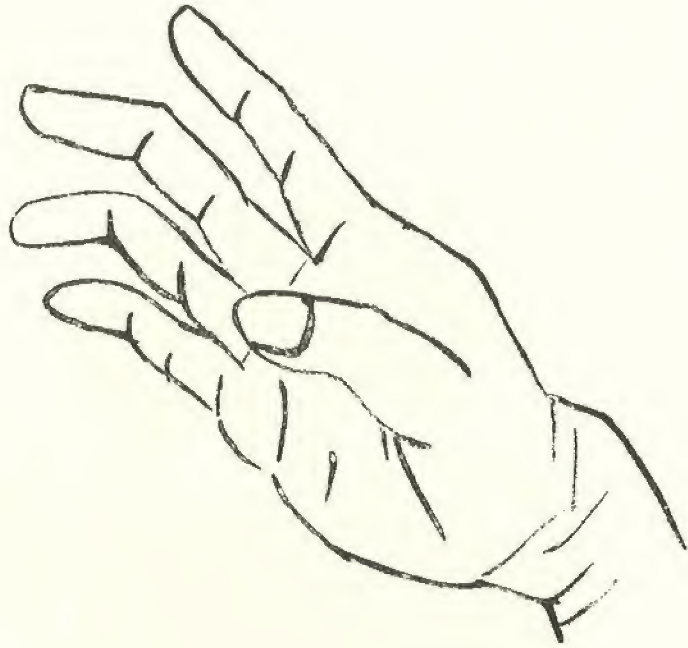
我恩師糸洲先生が支那の武備誌と云ふ拳法の書籍より寫されたものを、拜借して之れを寫し、今まで研究參考の材料として非常に大切に秘密に藏して居たが、友人の勸めもあり、又目下空手拳法の全盛時代、一日として自己一人の私するに忍びず、遂に之れを記載せし所以である。

熱心なる研究者に少しでも益する事が出來れば幸甚の至りである。

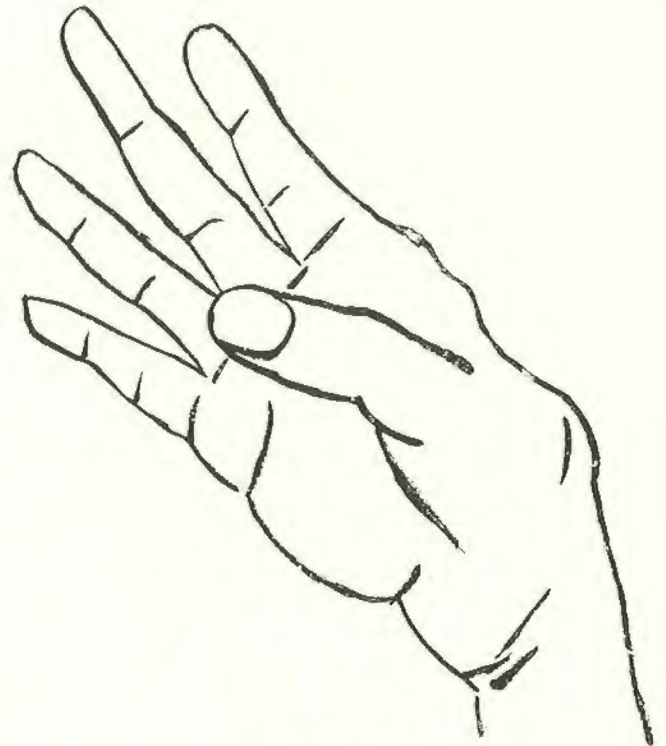
六氣手（昭林流）



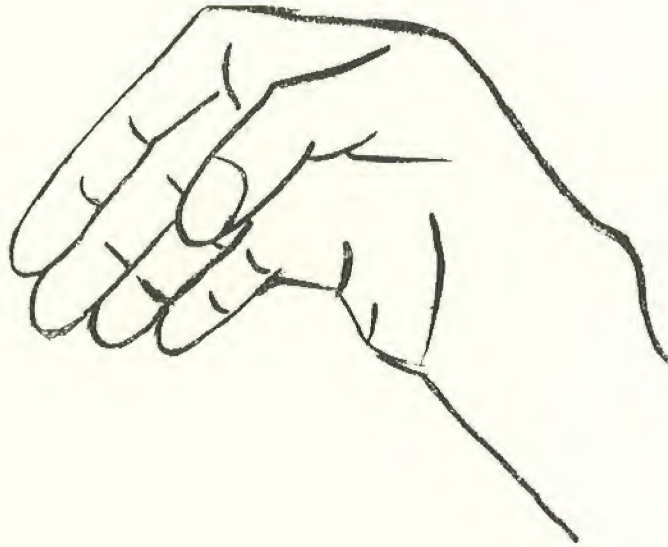
此手名鐵骨手打入人君須用此手或曰飯前打入君生吐血飯後打入人君魄散魂飛



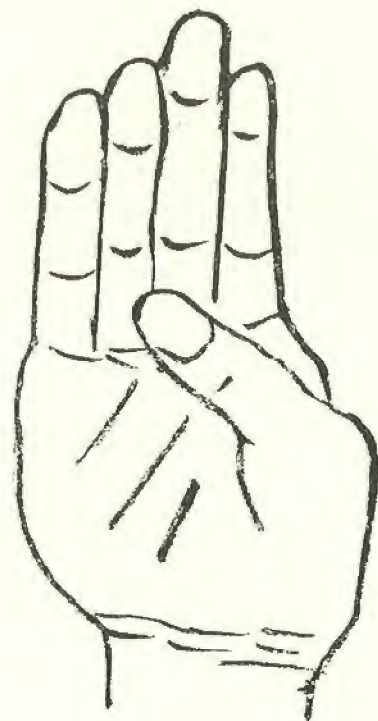
此手名爪子打腮邊並全圈下用之若打速着藥治之不醫吐血三人一月而死矣



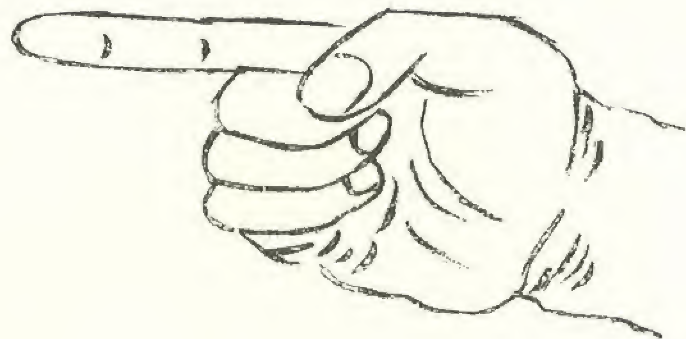
此手名鐵沙手用火煉成打入人後鐃用之若打入肉則爛速藥治之醫則死



此手名曰撒攪手打入人首血池用之若打其人可用姜水救之千萬不可到乖



此手名曰向天刀手打入
人骨節觔內用之打中不
能言速着藥治之不治死



此手名一路草技手打入
人膌背骨之用若打着藥
治之到久不醫半年必死

解脫法

欲攻東先打西。
髮被搏川巨戟。
我倒地入他驕。
扭我膽捐他面。
離吾身用逆踏。
脚踢高務隨後。
來吾裙用膝脫。
他勢低勿用足。
取我上隨他下。
搖步來防他踢。

欲踏前務隨後。
欲打他破天柱。
若抱後天撞後。
殺含泥戟他喉。
右欲捐右先椅、
椀吾手用吾椅。
欲踏我只用撲。
他勢高入於中。
扯我髮用脫甲、
手足相隨方無失。

欲轉身剛柔力。
他倒地頓他勝。
若抱前遇他陰。
臨吾身用吾棒。
脚欲踏手先戟。
構吾袖用戟棒。
欲踢他須用鈎。
取我下戟他上。
鎖吾喉用大砍。

拳足筋骨立様（邵靈寺流）



一



二


三


四

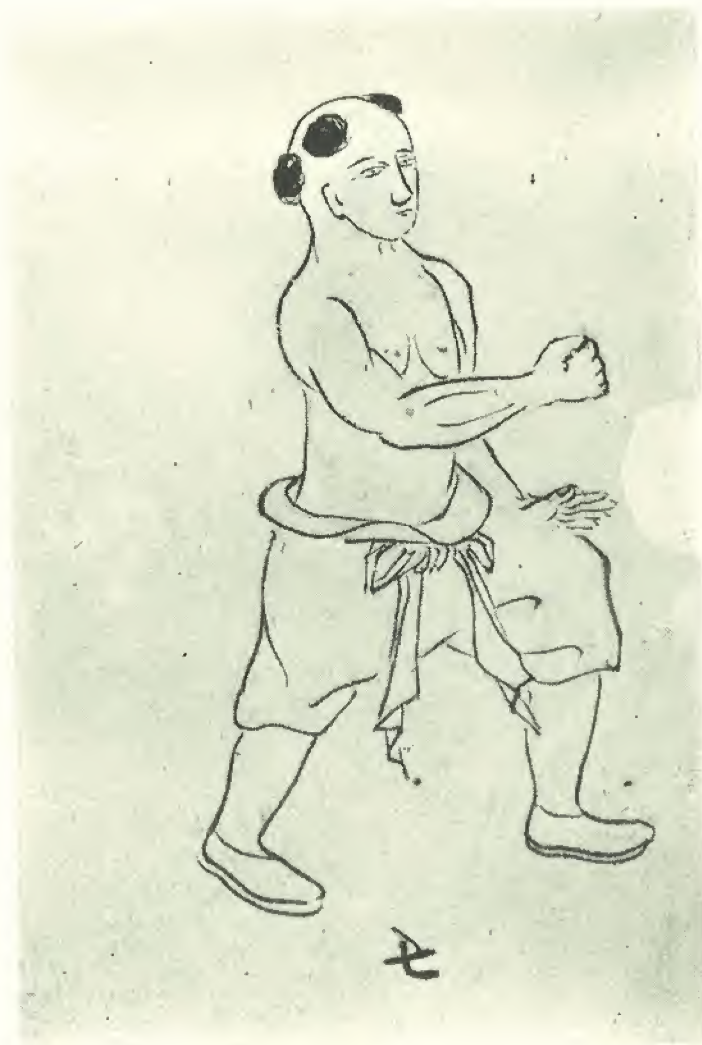


五



六


八


七


九


十



十一



十二



十三



十四


十五


十六



十七



十八



十九



二十


二十一


二十二


二十四

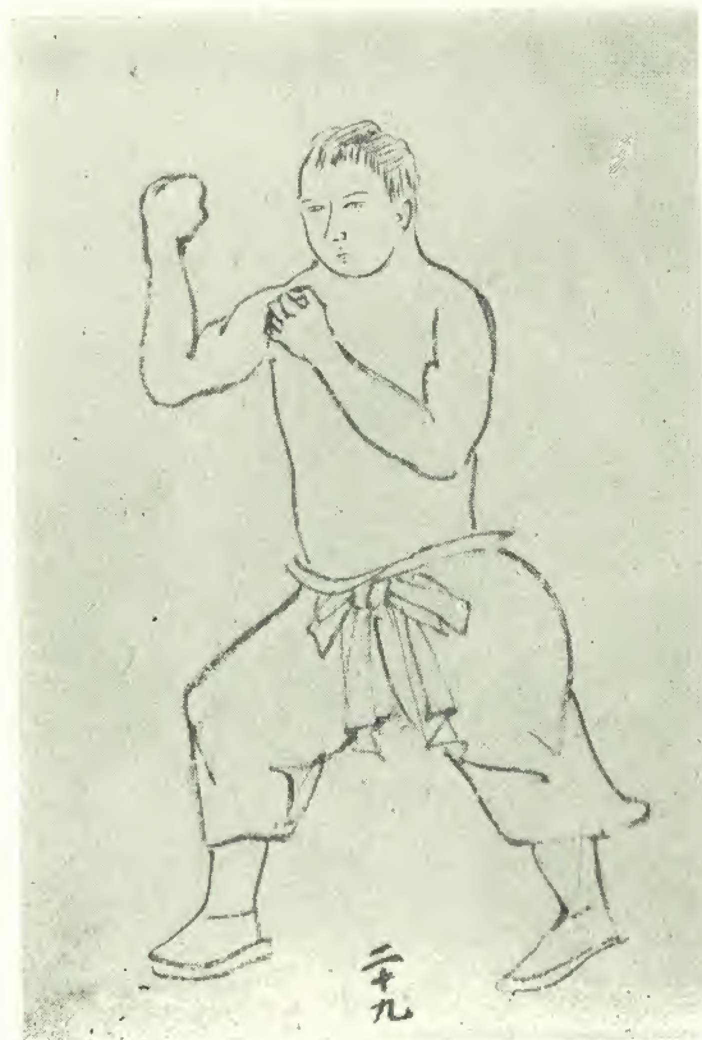

二十三


二十六


二十五


二十八


二十七


二十九


三十


三十一


三十二


三十四


三十三

十二時血脉的死注氣
大位急持可用不可動

古法大剛論章

再論、吾所レ學此法度。理ニ明十二時辰一。血脈按ニ分子午之法一。凡世人須ニレ受此法一。止レ可レ救レ人不レ可レ害レ人也。有ニ人通レ韜者一當門之教也。法有ニ輕重之殊一。故立ニ交接之道一以ニ熟能生巧一多中。則彼踈懶者必難レ用。凡レ有ニ與レ人打レ枷比勢其理一也。尤在ニ迅速一。不レ可ニレ作兒戲一。逢レ空則入。遇レ逃則趕。須ニ斟酌一。恐ニ失接一。旁人視レ之謂ニ我淺學一、比勢者顧ニ上下左右一。分作之門。拳手之法。順則用ニ草逆一逆則用ニ確中一過レ逃緊追。逢レ空緊入、逃レ之則去而來。順レ之則來而去。在レ上用ニ蝴蝶双飛一。在レ下用ニ撥水求魚妙手一。虎狼之勢。猛虎之威。交レ手應レ之法。在ニ着力認眞曉得一。剛柔虛實。剛來ニ柔中一柔來ニ剛中一剛刮柔發。身擒、脚踏、蝪起　身隨ニ手門戸一。規矩進退、不レ可ニ量情一是也。

血脉行腸腑一日死

子時



血脉行血盆十四日死

丑时




血脉行頭觜二十日上死
寅时
一日死
二十日死
太淵文


血脉左飯衝二十日死
卯时
太陽
合谷
京骨
京骨

辰时

血脉交肝[illegible]七歩死



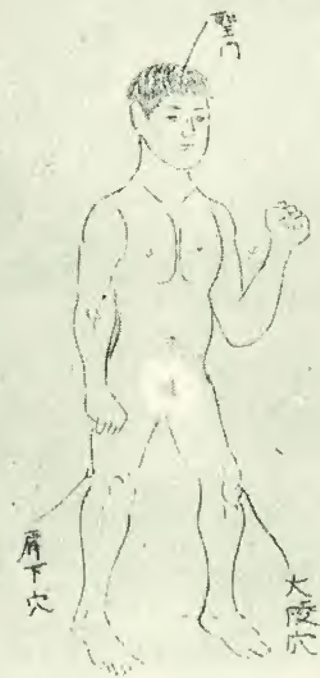
巳时

血脉左腸膈三年死



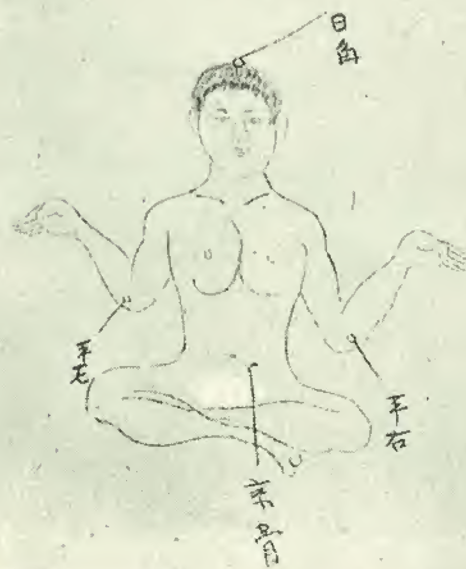
午吋

血脈在中心不可動



未吋

血脈在乳換一年死



酉时

血脉在软骨尾二日死



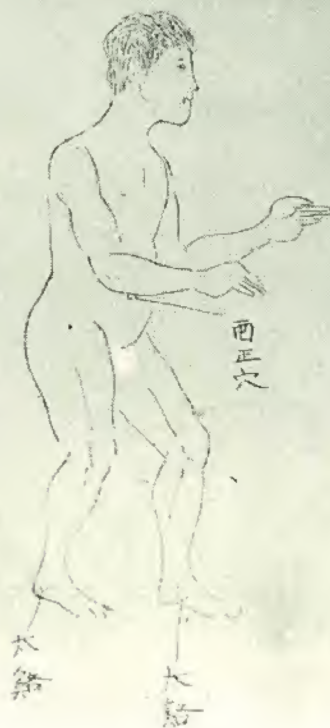
申时

血脉在二脉下十四日死



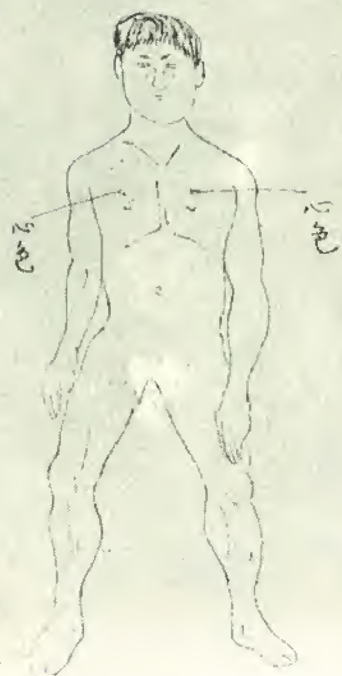
戌时

血脉在腸経三日死



亥时

血脉在肝経七日死



七不打

額門 一不打頭頂心是也

腦後 二不打後枕骨是也打則死

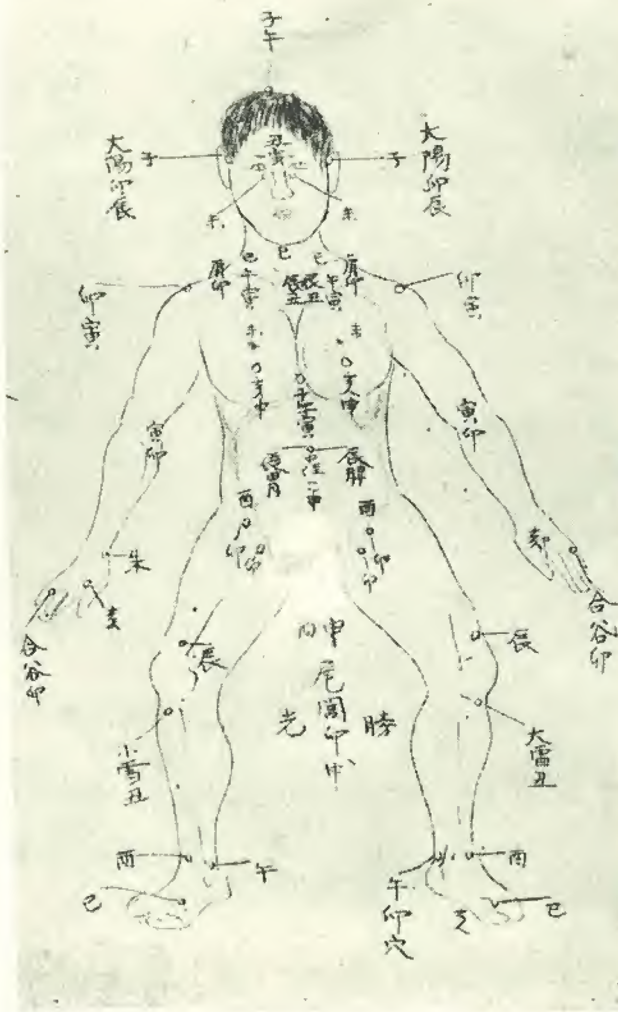
喉 三不打上聲下則死

兩耳後 四不打上午在左耳穴下午左右打閉則死口不能閉

臍上至心窩兩邊橫 五不打打則死

下陰 六不打打則死又橫肚西邊橫刈若打吐血死

乳 七不、打乳下第二骨內上午左穴為脉下午右穴為脉若打此兩邊穴端的兩月餘斷難醫活



四不治症

大凡打傷鎗刀所傷

一、口開不治　不能接氣

二、發陰下治　身體手足冷凍

三、目不轉珠不治　精神散

四、心撞不治　內腑已壞五金崩已

○

此手法及藥症乃、昭林寺傳流至今凡學學法須要時溫煉熟認眞百發百中無有不中也。

○

男人卅六穴左邊起女人卅七骨穴從右邊起春天血在人肩下第四骨起至谷兩三日過位夏天時血在肩下在七骨起至大暑第五日止过位秋天血在左邊第七骨起至寒露七日爲止冬天時血在第九骨起至大寒九

日爲止（應子午四季血脈交接）

神農琉璃腸一日食百草醫百病救百人知此穴位不傷人正可救人如他人被打傷用此藥救之可也。

○

十二時血脈藥方神効

若無靑草用此君臣解之

子時用藥　澤首一分沈香不乳香不　老酒一杯煎半杯服下

丑時用藥　射香一不茯苓不紅花不手七不　酒一杯煎半杯服下

寅時用藥　射香不沈香一分澤首二分肉桂二不手七二分　酒一碗煎一杯服

卯時用藥　眞珠一分射香二分蛇胆二分万毒虎二分　浸酒服

辰時用藥　紅曲一分白糟一分青桃仁五卜地枇杷二紅花二　酒煎服下

巳時用藥　上步用紅花二分下步用手七二分　沖酒服下

午時用藥　蛇胆二分庞香頭二ト香射子七分紅工絲二ト　酒三碗煎一碗服
未時用藥　杜仲一ト乳香二ト丁香二ト肉桂二ト　沖酒空心服
申酉時用藥　麥二ト右泰心二分水碗半煎八分　空心服
戌亥時用藥　紅二ト藩山紅二ト紅土絲一ト万蒜虎二ト　擂末沖酒服下



組手篇


青龍出抓手勝
丹鳳朝陽手敗


扭當胸手敗
掎後掉手勝


出戰機手敗
伸猿背手勝


猴穿斜手勝
虎争食手敗

將軍抱印手勝

猿兒抱蓮手敗



兩通身手敗

雙拜命手勝




身化边门用
三角戦手勝
進步單機手


雙龍戳水手敗
獨拿金獅手勝

龍吐珠手敗

鳳展翅手勝



拿桉剪手勝

穿心短手敗




鎖喉寒陽手勝
扭髮搶腿手敗


番雙鉸手敗
落地剪股
用假鉸勝


撓水求魚手敗
落地交剪勝


鳳啄珠手勝
鶴開翼手敗

刀牌法手敗

擭鼓勢手勝



鯉魚落井敗上

金蝉脱壳勝下





獨戦襲門手敗

掌刀赴會手勝



小鬼抜闖手勝

羅漢開門敗

後背伏虎手敗

後亭揉標手勝



雷打樹手敗

雨殘花手勝




雙龍戲珠手勝
白猴折筝手敗


弄雙虎手硬
擒青牛手化胶前步勝


雙合掌手敗
獨垂戟手勝


連地割葱手勝
登山大虎敗


手足齊到敗
羅漢播身勝


弄草枝手敗
醉羅漢勝


存一朵手勝
獨角牛手敗


短打穿心手破之勝也
孩兒抱蓮手敗

孫武子云

「知レ彼知レ己百戰不レ殆。不レ知レ彼而知レ己一勝一負。不レ知レ彼不レ知レ己毎戰必殆。故心先自家體認眞熟隨レ時變化。此所レ謂不レ戰而屈レ人。兵之極善者也。」

昭和九年十月二十三日印刷納本
昭和九年十月二十五日發行

空手拳法十八の研究
定價金壹圓五拾錢（送料八錢）



著者　摩文仁賢和
大阪市西成區津守町四一三

發行兼印刷人　仲宗根源和
東京市下谷區谷中清水町二〇

發行所　空手研究社　興武館
東京市下谷區谷中清水町二〇
振替東京三九七七三番

發賣所
栗田書店　東京神田區表神保町二　電話神田二二八九番
照林堂書店　東京市神田區錦町一ノ二　電話神田二七九八番
柳原書店　大阪市東區北久太郎町四ノ一六　電話船長四一四・四七九〇番

本邦唯一の空手研究雑誌

空手研究

九月創刊

定價金五拾錢　送料四錢

總振假名付
挿繪豐富入
毎號名大家
各先輩執筆

空手道の勃興は今や旭日昇天の勢である。各大學は勿論中學校、女學校等に於て、或は百貨店に於て、或は民間有志團體又は個人に於て、或は宮内省、警視廳等に於て、或は陸軍海軍に於て、等々あらゆる方面に空手熱は日に日に高まりつゝある。本誌は各師範、各道場、各團體等と密接なる連絡の下に、或は指導意見を、或は苦心研究の結果を、或は體驗談、或は武勇談、或は感想談等いやしくも空手研究に資するものは悉く綜合編輯し、空手道興隆のため貢獻せんとするものである。毎號各師範各先輩の執筆あり、初學者にも十分理解の出來るやうに振假名付にて、挿繪を豐富にし、讀みものとしても頗る興味深いものである。

發行所　東京市上野公園護國院大黒天脇
振替東京三九七七三番
（空手研究社）興武館

南洋日日新聞記者　志村秀吉著

海の生命線　熱帶の日本

◇四六版美本◇
◇口繪寫眞版十六頁◇
◇定價金七十錢◇
—送料六錢—

◇新刊好評◇

國際聯盟脱退が法律的に有効となる時には、南洋委任統治領は法律的にも日本の領土となる。其の時期は近づいた。日本國民は我が領土たるべき熱帶の日本、南洋群島に關する認識を深め、確乎たる信念の基礎に立つて三五、六年の國際危局に對處したければならぬ。本書は南洋日日新聞記者たる著者が、滯南十數年其地に生活しつゝ實地に調査研究せる處を多くの寫眞と和歌とを取り入れた特色のある著書で、興味深く讀みながら、群島の政治、産業、風物等あらゆる方面の知識を簡潔に收穫することが出來る。本書は通り一遍の觀光的記事と異なる故に、圖南の大志を抱く人にも好箇の指針となる。

發行所　東京市上野公園大黒天脇
振替東京三九七七三番
（空手研究社）興武館